

ごあいさつ

前の戦争の末期、陸軍の軍用機製造の仕事をしていたので、敗戦になったとき、ある種の責任を感じ、日本の復興の方法を考えました。しかし、一面焼け野原となり、どこも頼りになる地下資源もなく、手がかりが見つかりません。その中、連日新聞に出る原爆の威力の凄さが頭にコビリつき、あの凄いエネルギーをゆっくり出させることが出来れば、活路が見出せるのではないかと考えました。断っておきますが、あれだけ徹底的に負けると、奴隷にされる心配と、覚悟はしても、新型爆弾（当時の呼び名）を作って報復することなど、考えられるものではありませんでした。

昭和16年大戦を始めることになったとき、恐らく9割以上の国民は、石油の輸入を止められて、このままではジリ貧でやがて軍艦も戦車も動かせなくなる、直ちに戦うしかないと言われて、戦争に賛成しました。そして、今の日本人は当時より冷静で、思慮深く、報道に惑わされないようになったとは思えません。同じあやまちはプラカードや講演会で防げるとは思われません。

エネルギー源の多様化、外国から嫌われない努力を具体的に実行することが是非必要と考えます。

終戦後、占領政策で、原子核・原子力の研究開発が禁止されましたが、10年後に解禁になりました。私は自然に原子力の分野に入って行きました。戦争中は爆弾だけでしたが、10年後にはゆるやかにエネルギーを出させる原子炉が開発されていました。アメリカでは約80基の研究用原子炉を全国の大学に配置して研究と人材養成をしました。

日本では私学に3基、小型の研究炉が設置されましたが、米国のような国の経済的支援は全くありませんでした。国立大学では京都大学、大阪大学が共同という形で本格的な研究炉の建設が計画されました。大学内にこの計画に反対の先生が居て、建設用地周辺の住民の不信をかい、用地が決められず建設は5年間も遅れ、昭和36年12月によりやく着工できました。

戦争中の航空機設計、製造の経験と、解禁と同時に炉心計算などの勉強を始めていたことなどの理由で、原子炉の設計建設を担当することになりました。当初1,000kWで完成、2年後に5,000kWに出力を上昇しました。今更その程度の原子炉を作って何が出来るか、との批判もあったのですが、想像もしなかったさまざま体験をしました。一部は「原子炉お節介学入門（上下）」に述べました。

京大退官後は、後進の方々の周辺への気遣いの苦勞を少しでも減らすための応援を心掛け、近畿大学原子力研究所所長に就任後直ちに中学高校の教員を主な対象とする原子炉実験研修を始めました。原子炉の特性試験と同様の実験と、私の原子炉体験を主にした講義等を主に、最近では年間10回以上、15年間続けてきました。胃ガンのため胃の全摘手術を受けたときに1回休んだ以外は毎回、全力を注いで指導に当たりました。

可能な限りこの研修を続けるつもりでおりましたが、突然、大学から所長退任の通告

を受けました。それでもなお、所員が従来通りの基本的考え方と方法で続ける意思があるなら続けるつもりでした。

大きな力を持っている原子炉は本来安全ではない、破損、故障も避けられない。しかし、十分努力して維持し、異常の兆候に対して機を失することなく適切に対応すれば安全にできる、という基本的考えで研修を指導して来ました。この基本的考えから外れた考え方では「広い意味の安全」と安心は得られないことはいくつもの実例で証明されています。

ところが、所長退任にともない、この基本的考えが否定される方向に動き出しました。一時「柴田流」の研修が続けられない状態になりました。止むを得ず、「原子炉実験研修」は一先ず中止とすることにしました。

つまり、日常の仕事によって、お手本を示して指導する形がとれなくなったため一旦中止するというわけです。自身の経験もなく、実行できないことを教える、ということはわが国の原子力教育では広く行われていますが、これが混乱の大きな理由と考えています。研修の一時中止は残念ですが、このような考えによるもので、~~ご理解をお願いします~~
他意はありませんる次第です。

なお、新たな構想による研修プログラムを再出発させることを考えておりますので、各方面のご協力をお願いする次第です。